

映画『たそがれ清兵衛』の作劇における脚本と原作の関係

衛 藤 賢 史

(別府大学教授)

(1)

映画『たそがれ清兵衛』は、2002年11月に松竹をメインの製作会社⁽¹⁾として封切られた、山田洋次監督による上映時間129分の作品である。

山田洋次監督は、1961年に『二階の他人』でデビューして以来、一貫して松竹で作品を撮りつづけた生え抜きの監督であり、75本目にあたる本作品ではじめて本格派⁽²⁾の時代劇を演出することになった。

そういった意味で注目を浴びた本作品であったが、上映後の評価は非常に高く映画専門雑誌<キネマ旬報>誌が選ぶ年度ベスト・テン選出の2002年度の日本映画の部門で、見事1位に選ばれた。ベスト・テン選出での総評において「この年、ベスト・テン選者の支持を最も集めた作品が、山田洋次監督初の本格的時代劇『たそがれ清兵衛』だった。藤沢周平の短編小説3編を原作とするこの映画は、地方藩士の貧乏ながらも家族で手を取り合って生きる姿を現代劇と同じ目線からきめ細やかに描き、時代劇における日常性を見事に表現した。これまでのTV時代劇における、ある種の異世界感を取り払った意欲的な作品である」⁽³⁾と大きな評価を受けている。また、見逃せないのは同時に全国の読者が選ぶ日本映画部門のベスト・テン選出においても1位⁽⁴⁾に推されているという事である。

この事は、本作品が映画に携わる多くの専門家のみならず、一般の映画ファンからもいかに高い評価と支持を受けたかを伺わせるものであり、良質の作品であれば低迷していると言われた時代劇であろうと多くの観客を映画館へと足を運ばせられる事を証明してくれた作品ともなった。しかし、断っておかねばならないが、この場合の<良質>という意味は難解な内容を持つ<良質>な作品とは意味が異なるのだ。誰が見ても映画の内容つまり物語の流れがはっきりと理解できる作品という意味なのである。つまりある種の娯楽性を有している作品という意味になる。これがなければ、いかに<良質>の内容であろうと多くの観客を魅了し映画館へ足を運ばせるという、観客動員数⁽⁵⁾という<量>の問題をクリアする事はできない。

そして、本作品の場合のある種の娯楽性というのは大胆に言い切ってしまうと、時代劇という約束事の多いジャンルに、山田監督が今まで演出してきた現代劇の「日常性」のディテールを持ち込んだ事にあると思う。「S・ソントグが、撮影を見学に来ただけで、その時彼女が力を込めて言うんだよねく日本の映画はどうしてしまったのか」と。かつて民衆の日常生活をきめ細やかに描くのは日本映画がみだした技術でしょう。今、中国や台湾や韓国の映画人たちがそれを学んで映画を作っているのに、なぜ日本はそれをやらなくなってしまったのか。そう言われてみればかつての松竹はそうゆう映画を作っていたなあと」⁽⁶⁾山田監督が渡辺浩氏⁽⁷⁾とのロングインタビューで述べているように、本作品においてこの「日常性」という下級武士の苦しい生活のディテールを大筋の中に持ち込んだ事が時代劇でありながら、多くの観客の「よく分かる」=娯楽性という、つまり共感を生んだと考えていいのではないか。

この多くの不特定多数の観客が<共感>する姿勢が実は大事であり、「民衆の日常生活をきめ細やかに描く」作品を時代劇の中に持ち込む事によって、この作品は時代劇という枠を超えて程度の差というものはあるものの、観客は自分たちと同様の身近な生活の様子に<共感>したのである。この<共感>するというのは思考の問題でなく感覚するものであり、それは取りも直さず娯楽性という性質を含んでなければ感覚しえないものでもあるのだ。金澤誠氏は⁽⁸⁾「同時に長年思っていた、時代劇の問題がひとつクリアされた感じがある。その問題点とは、時代劇は『劇』という呪縛から抜け出すことはできないのかということだった」「主人公や他のキャラクターが味わった人生の実

感が、映像の中ではダイジェストされた『劇』にしか映らないのである。それはセットから扮装まで、現代にないものを用意して作らなくてはならない、時代劇の宿命なのかもしれないと感じていた」と述べ、生活感の稀薄さを失った時代劇というジャンルが、それゆえに観客から倦み飽かれました

ある事を憂えながら「だがこの『たそがれ清兵衛』は、その問題を見事にクリアしてくれた。この中には生きた人間の営みがある。山田洋次監督は、貧乏な海坂藩士・井口清兵衛の日常を丹念に拾っている。彼が娘と囲炉裏を囲んで内職しているときの何気ない会話、家族で粗食ながらもどこか温かさが漂う食事、夕闇迫る中で薪割りしている清兵衛を、娘が食事の支度ができたと呼びにくるシーンなど、真つ当な日常のリズムがこの作品にはある」「山田監督は彼が育った松竹という会社の特性でもあるだろうが、まず日常のリアルをベースにそこに生きる人間を捉えようとしている」ときめ細かな日常生活の描写を物語の核とした時代劇の出現を喜び、「時代劇は、この作品によって新たな時代を迎えた」と最大限の賞賛を贈っている。そしてこの評論の巻頭に「これほど見終わった後に満足感に満たされた時代劇は、久しぶりだ」と述べる事からはじめてはくはくの問題もさることながら、内容への〈共感〉という娯楽性をも念頭に置いての評論と考える。

このように日本映画のジャンルの中で長らく低迷していた時代劇に新たな一石を投じる形になった本作品であるが、オリジナルな脚本ではなく藤沢周平氏の原作が根底にある作品だ。根底にあるという曖昧な表現を使用したのは、藤沢氏の短編小説の三本をミックスしたのだからである。それは「たそがれ清兵衛」⁽⁹⁾「竹光始末」⁽¹⁰⁾「祝い人助八」⁽¹¹⁾という作品である。三作品に共通している内容は武家の掟である〈上意討ち〉の話であり、その他は時代も違ったり、主人公のキャラクターや生活の背景も異なる。この三作品を脚本上で合体させる作業はかなりの困難があったと思うが、山田洋次監督と脚本の朝間義隆氏⁽¹²⁾は見事な構成で脚本を完成させた。

以下(2)で藤沢氏の三作品についての紹介と、(3)においてこの原作の三作品をいかに脚本上に取り入れ構成していったかを分析していくことにする。

(2)

藤沢周平氏は、1927年山形県に生れ山形師範を卒業し、上京後、業界紙の編集に従事しながら時代小説を書き、1971年に浮世絵師の世界を描いた短編小説『溟い海』でオール読物新人小説賞に入選し、旺盛な文筆活動に入り1973年に『暗殺の年輪』が直木賞を受賞した後、業界紙を退社し作家として文筆に専念し、以降時代小説の第一人者として多くの作品を書いてきた。その範疇は武家ものから市井もの、歴史小説から伝記小説と広く、人間の心の襞^{ひだ}にゆっくりと分け入るような精緻な人物描写や、きめの細やかな風景描写に加えてストーリーテラーとしての確かな実力が読者の人気を呼び、1997年に惜しまれつつ亡くなった後も藤沢時代物の人気は衰えず、文庫本の総発行数は2300万部を超える作家である。

代表的作品としては『隠し剣孤影抄』『用心棒日月抄』『風雪の濫・立花登手控え』などのシリーズ作品でのロングセラー物、重厚な内容で文学的価値の高い『白き瓶』（吉川英治賞）『市塵』（芸術選奨文部大臣賞）などが挙げられる。

この藤沢氏の小説に早くから着目していた山田監督は特に短編小説『竹光始末』に深い印象を受け、映画化を考える。しかし脚本担当の朝間義隆氏が「しかし、この短編を劇映画として再生させるためには、沢山の工夫が必要だ。小黒丹十郎一家が海坂藩に到着してから、柘植八郎左衛門に上意討ちを命じられるまでの分量が、原作だけでは充分でない。木賃宿で子どもの寝顔を見ながら、丹十郎夫婦が拾った胡桃をわけあって飢えをしのぐというような美しい場面はあるが、それはあくまでも挿話に過ぎない。丹十郎が職を求めて訪ねる柘植家についても、当時の田舎の上流家庭の団樂や、主人のものの考え方、奥方の日常などに想像を巡らせてはみるものの、プロットの進行を担うまでにはふくらまない」⁽¹³⁾と述べているように、映画化の際のストーリーの核として構想してい

と思われる丹十郎が柘植から上意討ちの話しを持ちかけられるまでの流れが藤沢氏の小説ではまことにあっさりとしているのだ。

それでは、この『竹光始末』はどんな内容の短編小説であるかを見ていくことにしよう。

時代は江戸初期。海坂藩の木戸口に「若い木戸藩士は、その親子が馬揃えの広場の隅に姿を現したときから、何となく気になって眺めていた。正確には親子夫婦連れというべきだろう。貧相な風体の武士に、まつわりつくようにして、女一人と子供二人が歩いてくる」この武士の名は小黒丹十郎。もと犬山城主平岩親吉に仕え、平岩家が祿を収められたあと越前松平家を頼り、重臣吉田家に仕えたが大坂夏の陣で藩主松平忠直に軍法を犯してでも抜け駆けする事を進言して自殺したために、同じ松平藩の重臣氷見家に仕えたのだが、藩主忠直が次第に常軌を逸した行動を取るようになり、氷見家の16歳の当主の母親を側妾として差し出すような命令に反抗し藩主側と闘いになり当主の切腹で、丹十郎は闘いを逃れて妻子を連れて二度目の浪人の身となってしまったのだ。そして、もと平岩家での知人であり今は会津加藤家に仕える片柳図書の幹旋状を持参して、この海坂藩の物頭を勤める柘植八郎左衛門を頼って木戸口へと現れたのだ。しかし、頼みの柘植は所用で家を4～5日留守にしていると柘植の妻女から告げられる。路銀のすべてをはたいて、この柘植家を訪ねて旅してきた丹十郎は途方に暮れる。その様子を見てとった柘植の妻女は夫が帰った時の再訪を約して、子供たちの古着や「丹十郎の風体から推して、木戸を通るときいざこざがあつてはなかないと考え、一筆認めて印鑑を捺したものを渡したのであつた」などの親切を示す。柘植が帰り妻女の話しに首をかしげながら丹十郎に会う。話しを聞きながら海坂藩の新規召し抱えの問題ももう済んでいる事を知っている八郎左衛門は、1～2度しか会った事のない片柳の紹介という全く細いつてを頼りに自分を訪ねてきた丹十郎の扱いに困ってしまうが「正直な男らしい。と八郎左衛門は鑑定した。悪く理屈を言うでもなく、明日から親子四人のあてのない旅がはじまるというのに、いさぎよく立ち去ろうとする。このまま行かせては、気重いものが残りそうであつた」気分から奉公口を探してみる事を約す。しかしそれは、あてにしてもらいすぎたら困るがという一言を付け加えての約定であつた。旅籠で待つ生活がはじまった。丹十郎は川工事の日雇い人足の仕事をしながら待つが、もう旅籠代も払う余裕もなく、食事にも事欠く始末の状態となっていくようになる。ついに刀を売るまでのどん底の始末になった時、丹十郎は柘植に呼び出された。話の内容は余吾善右衛門という、しばらく前に新規召し抱えを受けた男がお上を誹謗する言動があつたので家老の命で上意討ちが決定したが、その男を首尾よく討てば新規召し抱えが叶うというものであつた。丹十郎は承知するが「相手が新規召し抱えの人間だということが、少し心にひっかかっていた。狷介だというその性格も、あるいは辛い浪人暮らしの間に身についたのかも知れない。何となく同士討ちという言葉も、丹十郎は思った。その男に、妻子はいるのだろうか」という複雑な思いもあつた。丹十郎が承知する事によって上意討ちは即刻実行にうつされた。しかし意外にも討ちに行った丹十郎に向かって「男は朗らかな口調で言った。「折角意気込んで来られたところを悪いが、俺は逃げる」「逃げる?」「さよう。見のがしてもらいたいのだ」「なぜ、逃げる。これはいわば果たし合いで、貴公にもこの藩に残る機会を与えられておる」「それは聞いておる。だが腕に自信がないし、ま、勝てそうにもないからの」余吾は屈託のない笑いをひびかせた」と拍子抜けのする言葉を吐く。これでは斬れんな、と思った丹十郎は余吾と話し込んでしまう。「しまいには丹十郎は余吾善右衛門という男と肝胆相照らしたような気分になった。すでに相手に対する警戒心は脱落している「ついに刀を売って宿賃を支払った。貴公は一人か」「さよう」「まことにうらやましい。妻子を持つと辛いぞ。見られい、中身は竹光じゃあ」丹十郎は大刀の柄を引いて、少し中身を見せた。だが、丹十郎の慨嘆に、余吾は沈黙したままだ。訝しように顔を挙げた丹十郎の目に、邪悪な喜びに歪んだ、余吾善右衛門の顔が映った。余吾の眼は、ひたと竹光を見つめている」それなら別だと余吾は丹十郎に突然斬りかかってきた。しかし、戸田流の小太刀を修行した丹十郎にとって小刀で充分の相手であつたのだ。「・・・武家というものは哀れなものだ。」「仕える主の非情と猜疑の前に、祿を食む者は無

力である」そう知りつつ余吾は藩勤めに未練が出た。その気持ちが痛いほど丹十郎は分かりながら、一方では明日からは飢えなくて済む、と辛酸を嘗めつくした辛い浪人暮らしからの脱却を感慨しつつ、それを懐かしいもののようにも感じている自分がいる事を丹十郎は心の中で見つめていた。

この内容を見ると、藤沢氏が常に物語の核として描くお上の都合によって生き死にの世界に動かされる下級武士の哀感と、にもかかわらずその事実をきっちり受け止めて覚悟を定めて生きていく彼らの生活がしっかりと描かれているのが分かる。しかし、この「竹光始末」は同時に主人公の丹十郎が家族を抱えて放浪する様の背後の歴史がかなりの分量をさいて克明に描かれているので、朝間氏が述べているように海坂藩に丹十郎がやって来てからのドラマの分量が足りないのが分かる。

これでは映画化するのはむづかしいと判断した朝間氏と山田監督は、同じ藤沢氏の短編小説を組み合わせて一本のドラマとしてまとめようとする。その過程の中で採択されたのが「祝い人助八」であり、「たそがれ清兵衛」である。

共に藤沢氏の作品でよく登場する剣士として腕の立つ下級武士であるが、同時に同僚からは変わり者として見られている男を主人公としている点が共通している。

『祝い人助八』では身なりの汚い武士が主人公として登場する。

「助八はいつもす汚れている。衣服は垢じみ、湯を使うのも稀なのか、時どき身体そのものが悪臭を放っている。助八は御蔵役だが、城の詰所に入る日はともかく、家から直接に城外の御蔵に出る日は、髪も結わずひげも剃らないのだといううわさがあった」と表現される伊部助八はそのため人からほいと助八と陰口を利かれるようになっていた。

ある日、藩主が急に思い立って御蔵を視察した時に「藩主は立ち止まった。念をいれるようにひくひくと鼻を動かし、それから助八を藩主はじっと見た。「におうのは助八か」「はい」助八の顔が真っ赤になり、つぎに青くなった」こんな助八をにがい顔でたしなめるという出来事があり、危うく家老から処罰を受けかかったが助八の上司である久坂庄兵衛が弁護してくれ事なきを得たが、家中の笑い者となってしまった。じつは、助八がこんなに身だしなみに無頓着になったのは、亡き妻宇根からの口やかましい干渉から解放されたのが原因であった。「宇根ははじめは物陰で助八にそう言うだけであったが、年月がたつとそこははまだ生きていた助八の母の前でも、ことごとく裕福な実家を引き合いに出して、婚家の暮らしの貧しさを議るようになった。そして姑が病死したあとは、誰はばかることのない悍婦となったのである」「齢下ではあっても、もちろん助八は伊部家の家長である。はじめの間はそういう宇根を強く叱責した。しかし、宇根の悍婦ぶりに、どこか人に無力感を抱かせるものがあるのに気付くまで、さほど手間はかからなかった。たび重なる叱責も言い争いも、とどのつまりは何ひとつ宇根を変えることにはならなかったのである」ような暮らしからの解放感でいささか暮らしの生活のタガが外れたせいだった。その助八の所に女性客が訪れる。飯沼の波津である。親友の飯沼倫之丞の妹であり、甲田家に嫁いだが離縁して実家に戻っていた。その原因は波津の夫であった甲田豊太郎の酒乱の癖にあった。その豊太郎が酔って飯沼家に向かったとの仲人からの知らせで倫之丞が助八の所へ避難させたのだった。「うつくしい目と白い頬、そしてほっそりしているように見えながら胸や腰の丸味は隠れもない波津を見ながら、助八は思った。むかし見た波津は、いまの本人に比べれば繭にこもる前の蚕のようなものだったというほかはない」ほどの美しく成熟した女性に変身した波津にとまどいながら、助八は家に導き入れた。しかし、男やもめの家に波津を泊めれば、その事がもし人の知るところになれば家中をゆるがす醜聞になりかねない。そのため、もう豊太郎が引き上げた頃合を見計らって助八は波津を飯沼家に送った。しかし、豊太郎はまだいた。それも倫之丞に果たし合いを強要しているのだ。文弱の徒である倫之丞への理不尽な要求である。ねちねちと絡む豊太郎に助八は咄嗟に代役として自分が果たし合いをする事を申し出る。翌日、寺の裏での果たし合いに助八は白木の棒を持っていく。豊太郎も大柄な身体で腕に覚えのある男であったが、「わずかずつ足場を移しながら、二人の対峙は長くなった。見

ていた男たちは息を呑んだ。隙のない棒の構えもさることながら、助八の眼光の鋭さに圧倒されていた。助八の印象はさっきとは一変して、猛禽のような瞬かない眼が豊太郎の動きを窺っていたのである。「助八は踏みとどまると、そこからわずかに一步、逆に踏み出した。その動きが豊太郎の打ち込みをぴったりと迎え撃つ形になったと見えたとき、助八の手もとに操りこまれていた棒が、魔のようにのびて豊太郎の小鬢を打った。ぱんと、乾いた音がした。見ていた男たちの目には、一閃の白光が動いたとしか見えなかったが、豊太郎の身体ははじかれたようにうしろに飛んで倒れた。そのまま昏倒した。男たちが騒然となったときには、助八はもうその場に背をむけていた」それほど強さを見せつけられて、豊太郎はもう敗北を恥じて波津のもとには姿を現さなくなった。後日、倫乃丞が波津を後添えにもらってくれないか、波津もそう望んでいると助八に言ってきたが「波津の性格の好ましきはわかっていた。しかし嫁に来たら、その波津といえども、長い年月の間には婚家の貧しさに疲れて惇婦になりはしまいかと、助八は思っている。助八の胸の中には、まだ亡妻宇根とのにがい歳月の記憶が瘤っていた。波津をあんなふうにしたくないと思った」気持ちからことわりの返事をするのだった。そして、亡父が助八に「伝えた技は、わが身を守るときのほかは、秘匿して使うな。人に自慢したりすると、のちのち災厄をまねくことになるぞ」と予言した災厄が助八の身に降りかかってきたのだ。家老が助八を呼び出し、組頭の殿村弥七郎が中老の内藤外記を城内で刺殺し、家にて死にたい、藩は討手を送れと言ってきた件で助八をその役を仰せつけると言うのだ。断れば甲田豊太郎との果たし合いを私闘とみなして祿を減らすと強圧的な態度である。殿村は本物の剣客であり豊太郎などは天と地ほどの腕の差がある相手である。死を覚悟した助八は急用と言って波津を呼び出し身なりを整えてもらう。髪を結ってもらいながら助八は波津に結婚を申し込む。しかし、ついこの間、よそとの縁組が決まったと小さな声でいう波津に自分の身勝手さを恥じるのだった。上意討ちの闘いは凄まじいものとなった。およそ二時間におよぶ斬り合いの末、辛くも勝利を取めた助八だったが二の腕と腿を斬られていた。まず傷の手当てをせねばと助八は思ったが、医者がどこにいるのかもわからない「波津なら知っているかも知れなかったが、その波津はもう帰ったはずだった。お帰りはもうお待ちしませんからと波津はいい、小声で、御武運を祈りますと言って助八を送り出したのである。当然だ。あの人は赤の他人なのだからと助八は思った。そして突然に、これまで感じたことのないような強い孤独感に、身体をひしとしめつけられるのを感じた」

「ようやく住む町にたどりつき、わが家の粗末な門を目でさぐったとき、門の前のうす暗い路上に、黒い人影が立っているのが見えて来た。助八は立ちどまった。助八が立ちどまると、黒い人影は下駄の音をひびかせながら走り寄って来た。ほの白い顔は波津である。幻を見ている、と助八は思った」

短く歯切れのいい文章を積み重ねながら、つつましい男女の愛の姿を浮き彫りさせる幕切れは深い余韻を読者に与え、藤沢氏の独壇場の構成が冴える一編であり、朝間、山田両氏の脚本上に大きな力を与える作品となっていったが、さらに「たそがれ清兵衛」が脚本作りの大きな飛躍となったと朝間氏は「いかにも藤沢さんならではのしゃれた設定で、時代劇というジャンルに堅苦しく捕らわれず、むしろホームドラマを描くような気楽さで、東北の小藩の下級武士のつましい生活を見つめてみたらどうですかと、忠告されているような気持ちになったものだった」⁽¹⁴⁾とこのように述べている。つまり、時代劇というジャンルにこだわりすぎた朝間氏にホームドラマ調という自分の土俵で時代劇を作ればいいというヒントを、この作品が教示してくれたと言うのだ。

では映画のタイトルにもなった『たそがれ清兵衛』はどんな内容であるのかを見てみることにしたい。

この短編は、家老杉山頼母の屋敷に藩の重臣ふたりが寄り合い、藩の筆頭家老堀将監の排斥を相談している場からはじまる。藩は七年前未曾有の凶作に見舞われ、藩の財政上に大きな打撃を与えた。種々の方途を構じるもうまくいかず、ついに重臣たちが職を辞す羽目となり、代わって組頭が

ら筆頭家老にのぼった堀将監が能登屋という利にさとい振興商人と組み、一時的だが藩政を安定させた。しかし、堀とその一派は専横をきわめ反対派への弾圧だけでなく、この独断的なやり方に激怒した藩主の排斥までを計画しはじめていた。頭脳明晰で覇気もある藩主だが病弱であり子供もないこの現藩主を隠居させ、弟を次の藩主に祭り上げようと画策している事が江戸家老からの情報で分かってきたのだ。

家老杉山たちは重職会議を開き、この件で弾劾し堀たちを追い落とす作戦を考える。しかし、重職たちの過半数は堀たちの一派に握られていた。そこで、もしその会議で堀たちの退陣の要求が否決されれば最後の手段として藩主から堀の上意討ちの許可の一筆をいただき堀を誅殺するという過激な計画であった。しかし、障害がある。それは堀が若い頃に剣を学びかなりの使い手であったという事と近習組の北爪半四郎という小野派一刀流の達人が常に側に控えているという事だった。少なくとも北爪と互角に闘える藩士の調達が絶対に必要な条件となる。思案の末に郡奉行の大塚七十郎が、勘定組の五十石取りの井口清兵衛の名をあげた。それにより清兵衛は本人の知らぬ間に、藩の重臣たちの真つ二つに割れた政権争いの渦中に否応なく巻き込まれていったのであった。

一方、己の身の生殺与奪が自分のまったく預かり知らぬ場で決められつつあるという事を露ほども知らぬ井口清兵衛は下城の太鼓が鳴るや「すばやく手もとの書類を片づけ、詰所の誰よりも早く部屋を出た。部屋の出口で、もごもごと帰りの挨拶を言ったが、それに答える者もなく、またとくに清兵衛に眼をとめた者もなかった。清兵衛の帰りが早いことには、みんなすっかり慣れっこになっているのである」その帰り道で夕食のおかずを買い、そのまま自宅にもどると寝たきりの妻女奈美を厠に連れていき台所に立つ「飯を炊き、汁を煮るその間に、朝は出来なかった家の中の掃除を頼かむりしてざっと済まし、雨戸のあるところは雨戸を閉め切る。そういう姿を、同じ組屋敷の者に見られることから、たそがれ何とかと蔑称めいた渾名が立っていることは、清兵衛も承知しているが、妻女が病気に倒れて数年、ほかにひともいない家だからやむを得ないのである」そして出来た夕食をふたりで済ますと、内職を妻の傍らでしながら話相手となってやり、妻が寝る前にまた厠へ連れていき、それから本格的に身をいれて内職に励む、という生活を毎日送っていた。妻の奈美は5歳の時両親を失い、遠い血筋を頼って清兵衛の家に来た。年頃になったら井口の家から嫁に行くはずだったが、清兵衛の両親も早く病死し遺言によりふたりは夫婦になったのだ。その奈美が病気になった。医者の見立ては労咳という。何とか山麓の湯宿に湯治にやりたいが、五十石の低い身分ではその費用がなかった。そのため清兵衛は出来る限りつましく暮らし内職をして費用を貯めていたのだ。

そんな清兵衛の下に大塚七十郎がやって来た。急用であり家老の杉山家へ同道しろという。杉山は清兵衛に一切他言しないことを誓わせてから、堀への上意討ちの一件を打ち明ける。しかし「清兵衛は首を振った「ただ、その会議は夜分でござりまして・・・」「それがどうした？」と杉山は言った「非常の重職会議は、家臣下城後の暮六つ（午後六時）からという慣例がある。それに日取りはもう決まって、変えることは出来ん」「夜分はその、それがいろいろと、のっぴきならぬ用を抱えておりました・・・」「女房に飯を食わせたりする仕事であろう」杉山は言ったが、そこでやりと笑った。「たそがれ清兵衛とかいうそうだな。飯を炊いたり、掃除をしたり・・・」「ほかにも、女房の厠通いを介抱したり、暑ければ湯をわかつて身体を拭いてやったりという仕事もあるらしゅうござる」大塚七十郎が、その後周辺から聞きあつめたらしい話をつけ加えた」杉山はしみじみと清兵衛を見つめ「しかし、そなたに命じておることは藩の大事じゃ。女房の尿の始末と一緒に出来ん」とたしなめたり加増の約定をしたりして説得するが清兵衛は頷かない。ついに妥協して清兵衛が奈美の世話後の六つ半（午後七時）会議場所に来ることと、首尾を果たしたら湯宿への湯治をさせ藩医を世話するという約定で清兵衛は承知することになった。その会議は紛糾した、もう決着をつけなければいけない時間だが清兵衛はまだ現れない「一藩の危機と女房の病気の、どちらが大事だと思っているのかと、杉山は胸のうちにある井口清兵衛の馬面に罵り声を浴びせたが、あの清

兵衛なら、どっちとも判じかねると首をかしげるかも知れないと思うと、苛立ちはよけいに募って来た」頃やっと現れた清兵衛の剣の腕は重臣たちの期待をはるかに上回る凄腕だった。「そのときには、杉山の目くばせを受けた井口清兵衛が、風のように人びとの背後を走り抜けて、堀の背に迫っていた。清兵衛は、ひと言堀に声をかけた。振りむいた堀が小刀に手をかけるところを、清兵衛は抜き打ちに斬った。軽やかな太刀さばきに見えたが、その一撃で堀は横転した」

政変は堀の死で決着した。杉山が筆頭家老になり、堀派は一掃された。「杉山頼母は、政変のいそがしい中にも、忘れずに辻道玄をさしむけて来て、なおほかにのぞむことがあれば、この際だ、言えと言ったが、清兵衛は固辞して、妻女の養生の援助だけを受けることにしたのである。実際に、ほかにはさほど、望むものはなかった」

湯宿での養生と辻道玄の薬で奈美は日に日に元気になっていく。清兵衛は、ただそれだけの事で十分に幸せであったのだ。

清兵衛は武士のたしなみである剣の修行で抜きん出た才能を有したがために、上意討ちという非情の世界を体験しなければならなかったが、しかしそれは武士でありながら清兵衛にとっては非現実の世界の出来事が降りかかって来たという意識に過ぎないのだ。

現実の世界とは平凡に淡々と毎日が穏やかに過ぎていく日常生活の毎日の中にあつた。

「実際に、ほかにはさきほど、望むものはなかった」生活の中にこそ清兵衛の本当の世界があつたのだ。

この清兵衛と奈美の生活の細やかな描写は、たしかにホームドラマである。等身大の人間を時代劇の中に登場させる、という発想に朝間氏が脚本を構成させる上で気持ちを楽にしてくれた、というのがよく分かる作品である。そして、『たそがれ清兵衛』というタイトルになったのも、これはホームドラマを基調にした時代劇なのだ、という朝間氏と山田監督の決心の現れと見てとっていいのではないかと思うし、この作品に出会ってから急速に脚本が動き出したというのがよく理解できる作品なのである。

(3)

山田洋次監督はインタビューで、初の本格的時代劇が藤沢周平作品のそれも侍の世界を描いたものになった経緯の質問に「藤沢作品が面白くて、こうゆうのを映画にできないかと思うようになっていた。藤沢作品のような肌のぬくもりを感じる人間像を映画にしたい、この二つの思いが重なり合って『たそがれ清兵衛』にたどりついた⁽¹⁵⁾と述べている。そして脚本を共同で担当した朝間義隆氏によれば「山田さんは時代劇作りのための知恵をもらいに、藤沢周平さんを訪ねたと言う。その縁で、藤沢さんの作品を広く読むことになり、特に短編「竹光始末」に深い印象を受けた。山田さんがこの小説を映画にしてみようと決めたのは、1997年の夏ごろのことだった⁽¹⁶⁾と述べているように、まず「竹光始末」が最初の企画として上がったのは間違いない事実であろう。しかしこの「竹光始末」だけで映画化しようとした試みは消滅する。この短編を劇映画として構成するための内容のボリュームが足りないと判断されたのだ。補足として藤沢氏の市井物から女性を主人公にした短編を導入する事も考えたようであるが、「武家物」と「町人物」の合体は水と油の関係のようにどちらかが浮いてしまうと分かるまで一年が経過したという。それが「たそがれ清兵衛」という短編に巡り合った事から、脚本に大きな発想の転換が生まれていく。この愛妻家の清兵衛が挑む闘いの相手を「竹光始末」の余吾善右衛門に置き換えて脚本を練り直し、2000年に、その第一稿が完成したと朝間氏は言う。朝間氏は「この脚本には、今でも愛着がある。下級武士の日常については全くと言っていいほど資料がなく、手探りでおぼつかなく書き進めたものだったが、貧しい藩士の生活描写と真正面に向きあう時代映画はおそらく初めてだろうし、藤沢さんの世界にちりばめられているやさしい風景もたっぷり取り入れられている⁽¹⁷⁾と残念がるが、「だが、山田さんはこの本を持って撮影を開始することにはたやすく踏み切れぬ様子で、「夫婦の物語が、決闘のための長

い、ひたすら静かな序章に過ぎなくなっている」と反省するのだった⁽¹⁸⁾。ために脚本が動かなくなり2001年3月、映画は棚上げの状態となっている。この事に関して同じインタビューで、藤沢作品の三つの短編が原作になっているが、脚本作りに苦労したのではないかという問いに「一人の浪人が、上意討ちを果たしたら士官させてやるという条件で戦う「竹光始末」がこの映画の要になると思ったけど、主人公が浪人でいいのか、随分悩みました。浪人という設定で脚本を書いてみたがうまくいかない。そこで考え方を改めて主人公をうだつの上がない平侍にしてみた、今なら大企業で働いている平サラリーマンの物語に置き換えてみて、その侍が上意討ちを命ぜられるという風に考えたらうまくいくんじゃないかと思い、主人公に『たそがれ清兵衛』を選んでみた。そこまでに三回書いて、その三回目のホンが今の準備稿になるんだけど、あまり自信がない。どうしようかなと悩んでいる時にカメラマンの長沼（六男）君が来て、「どうしてこれを映画にしないんだ。絶対すばらしい作品になる」としきりに言うんで、もう一度考えていくつかのポイントを見つけて、ここをもう少し膨らませてみたらとか、ここはいらなくて形で脚本を書き上げていった。一年がかりでした⁽¹⁹⁾と苦労を述懐している。このいくつかのポイントを朝間氏は次のように述べている「やり切れぬ思いを引きずってそれから半年、幸いなことに熱心に応援する人たちの励ましで、「たそがれ清兵衛」をもう一度だけ検討してみようということになった⁽²⁰⁾。すると意外なことに、立ちふさがっていた壁が時間とともに消え去っていて、改定の方がはっきり見えてきたというのだ。その方向とは次のようになる。

- (一) 物語を、清兵衛の妻の葬儀から始める。
- (二) 残された二人の娘に、更に老いた母を加えた家族構成にする。
- (三) 清兵衛の少年時代からの親友と、その妹朋江を新たに登場させ、清兵衛と朋江が結ばれるまでを物語の骨子とする。
- (四) 清兵衛の職場を御蔵方とし、その同僚、上役の日常を詳しく描く。
- (五) 決闘の場面については「竹光始末」を用い、余吾善右衛門をより狂気を帯びた不幸な侍として描く。
- (六) 物語全体を、下の娘以登のそれから五十数年後の回想という形にし、彼女のナレーションで物語を進行させて、清兵衛が幕末に生きた人間であることを強調する。⁽²¹⁾

つまり、この段階で「祝い人助八」が脚本に導入されたと思えていいと思うが、この改定が脚本の上でスムーズに物語を進行させる事となり、結果的に藤沢作品の三本が脚本の中で渾然と溶け合ったひとつの物語として再生されていったのである。

今まで見えなかった物が、若干視点を変えると目から鱗が落ちたように鮮明に一本の流れがつながる場合が創作の仕事ではよくある現象だ。そして、この場合の視点の変化の中心は（三）ではないだろうか。つまり「祝い人助八」をこの脚本に付け加え、飯沼の妹波津を脚本では朋江とし、清兵衛と朋江との交情を物語の芯にして、（二）を従にして絡めていくともうそれだけで濃密なホームドラマとなり、山田監督が「夫婦の物語が、決闘のための長い、ひたすら静かな序章に過ぎなくなっている」と悩んだ構成がうねりを持つ重層的な物語へと変化していく事になるはずだ。「竹光始末」で藤沢作品の市井物を入れて町人の女性を主人公にからませようとして失敗した苦い経験が、朋江という薄幸の武家の女性をからませるという視点に転ずることで立派に生きたと言っていいかもしれない。

このような苦労の末に山田洋次監督と脚本家朝間義隆氏の共同脚本による新生の『たそがれ清兵衛』が完成したのは2001年7月であった。この脚本はもう迷うことなくひと月ぐらいで完成したと言う。

完成稿は全体のシーン数が86シーンからなり、台詞は庄内（現在の山形県鶴岡市）地方の方言で語られている。これは藤沢作品にはない、山田、朝間両氏のオリジナルな構成だ。

「竹光始末」「たそがれ清兵衛」そして「祝い人助八」の三本の原作を素材として練られた脚本

『たそがれ清兵衛』はそうしてこのような物語へと変化する。

時代は幕末元治二年（1865年）、東北の庄内地方の海坂藩の下級武士井口清兵衛は長患いの妻を亡くす。手元に残された十歳の萱野、五歳の以登のふたりの娘と毫碌はじめた母を養い、さらに葬式費用での多大の借金を返すため、清兵衛は毎日、御蔵役の仕事が済むと脇目もふらず帰宅していく。身なりをかまう暇もなく無精髭に継ぎはぎだらけの着物、月代も剃っていないので、その姿は見すばらしい。口がさない同僚たちから「たそがれ清兵衛」と陰口をたたかれている。たそがれ時に下城の太鼓が城内に鳴るや家路につく事から、そういうあだ名がつけられたのだ。しかし、家で毫碌のひどくなり息子の清兵衛すらも時には忘れてしまう母の世話、炊事、洗濯、畑仕事、ふたりの娘の養育さらに借金の返済のため深夜までの虫籠作りの内職と、とても同僚の酒の誘いなどに付き合う暇も金もない。ある日、蔵の視察に来た藩主から、あまりの薄汚い身なりを注意される。怒った伯父から後妻をすすめられるが「二人の娘が日々育っていく様子を見ているのは、例えば畑の作物や草花の成長を眺めるのにも似て、実に楽しいものがんす。おんっあまが世話して下さる方が、この気持ちわかって下さるかどうか」など理屈をいい伯父をますます怒らせるのだった。母に甘えたいさかりのふたりの娘も「お前がた、おかはんがいねと寂しいか」「おとやんがいてはるさけ、寂しくね」と健気で家事の手伝いなども進んでやるのだ。ある日、清兵衛の幼友達で上級藩士の飯沼倫之丞が京都での仕事から帰り倒幕の荒々しい雰囲気清兵衛に話すが、それは遠い世界の非現実な出来事ぐらいにしか思えない。それより酒乱の甲田豊太郎に嫁いだ飯沼の妹の不幸な離婚話の方が身にしむ話だった。

その日、家にもどると「お帰りなさりませ」「や、これはー」「お忘れでしょか、飯沼の妹でがんす」朋江が来ていた。匂う花のようにきれいに成長した朋江に清兵衛はどきまぎしながら、しかしふたりの娘が早くもなついているのを見て清兵衛はうれしく思った。朋江を囲んでの楽しい夕餉のあと、清兵衛は朋江を飯沼家に送った。そこには、別れた夫の豊太郎が泥酔して玄関で喚き散らしていた。おびえる朋江。倫之丞へ難癖をつけ果たし合いを強要する豊太郎に清兵衛は代人を申し出る。翌日、清兵衛は朋江のために封印していた剣の腕を解く。般若寺の裏での果たし合いは、削った棒一本で豊太郎を打ちのめしてしまう。その噂はすぐに人の口から口へと伝わってしまう。その事を後に兄から聞いた朋江は手紙で「私のことであなた様に変なご迷惑をおかけしたことをお詫びしなくてはなりません。でも、私はうれしゅうございました」と清兵衛への思いをつつましく吐露する。その後も朋江は何くれとなく清兵衛の家を訪れ、家事やいまや母のように慕うむすめたちと遊んでくれるのだった。

ある日、倫之丞は清兵衛を川釣りに誘い、そこで朋江と一緒にしてくれないかと頼む。朋江への思いは清兵衛もあるのだが、あればあるほど、貧乏な下級藩士の生活で大事な朋江の精神を傷つけたくなかった。清兵衛たち下級藩士の日々の生活はそれほど困窮していたのだった。清兵衛は断る。以来朋江の姿はぷつぷつと清兵衛の家から消えた。

その頃、藩では藩主が急な病で亡くなり、政変の嵐が吹きまくった。清兵衛たち下級藩士にとっては遠い世界の出来事だったが、清兵衛は巻き込まれた。あの般若寺の一件で剣の腕に目をつけられたのだ。上司の久坂長兵衛から呼び出され、連れていかれたのは家老の堀将監の邸宅だった。そこで清兵衛は堀たち重臣から謀反派と見られた余吾善右衛門の上意討ちを命じられた。余吾は手練の剣士であり、薄気味悪い雰囲気を持つ男であった。上司であった長谷川殿に藩士として忠誠を尽くしただけであるのに何の謀反のお咎めなのか、と言って切腹を断り、どうしても討ちたいならば討っ手を寄せといい家に閉じこもってしまっていた。そして、現に討っ手に選ばれた男を返り討ちにしてしまったので、清兵衛に次の白羽の矢が立ったのだ。清兵衛は「長い年月、若い娘たちと病に伏す妻と年とった母親を抱えて日々の暮らしに追われる中で、恥ずかしながら、私は剣への志しを失くしてしまいました。真剣の勝負は・・人の命を奪うということは、獣のような猛々しさと、命を平然と捨て得る冷酷さがなければなくてはならぬ。それが今の私には全くありましね」と必死

で辞退するが「藩命すなわち藩主の命令である。それを断るなど思い違いもはなはだしい」と家老が怒鳴りつける。今はこれまでと、清兵衛は承知する。

家に戻った清兵衛は「手燭を手に部屋に入ってきた清兵衛、かがみ込んでしばらく娘たちの寝顔を見ているが、やがて小刀を手にして立ち上がる。土間に下りた清兵衛、手桶の水を柄杓で汲み上げ、かがんだ膝の前に置いた砥石を濡らす。小刀を抜き放ち、目釘を抜き出して柄を外す。手燭の明かりで刃をしばらく眺めた後、砥石を当てて静かに研ぎ始める」一連の動作を慣れた手つきでやっっていく清兵衛の横顔は鬼気迫るものがあった。

朝。家族との永遠の別れになるかも知れない食事をとりながら、その態度はいつもと変わらない。塾にいく娘たちを見送ると下男の直太を朋江のもとに使いに出した。直太のたどたどしい口答での用事を聞くや、何事が起こったかを察した朋江はすぐに身支度を調べて駆けつけた。清兵衛は淡々と上意討ちのための身支度を頼んだ。「お出かけは何時でがんですか」「巳の刻とされています」「あまり時間がありましね。すぐに」朋江の動作はきびきびして少しの無駄もない。「お聞きしていいでがんしょか。果たし合いの相手はどなたでがんです」「余吾善右衛門という方でがんです」櫛を使う朋江の手がふと止まる。「私の元主人甲田が親しくしていた、あの余吾様」ふっと溜め息をつき、仕事を続ける朋江。

玄関で清兵衛は激しい衝動に突き動かされて言う「思えば、幼いころから、あなたを嫁に迎えることは私の夢でがんした。これから私は果たし合いに参ります。必ず討ち勝ってこの家に戻ってきます。そのとき、私があなたに嫁に来ていただくようお頼みしたら、受けていただけるでがんしょか」しかし、朋江の答えは意外だった。数日前に持ち込まれた縁談を承知したというのだ。清兵衛は力なく笑った。残る朋江を清兵衛の母がぼんやりと眺める。朋江は放心のまま挨拶する「お婆様、今日のご気分いかがでがんですか」「どうもありがとうございます、あなたはどちらのお嬢様でがんしたかのう」「はい、私は清兵衛様の幼なじみの朋江でがんです」朋江の目から突然涙があふれ出す。

清兵衛は余吾の家に入って行く。「余吾善右衛門殿、上意によりお命頂戴いたします」部屋の中であぐらをかいて酒と徳利の前に座っていた余吾は「たそがれ清兵衛。やっぱり、お主が来たか」とのっそり立ち上がった。身構える清兵衛に「お主がせっかく意気込んで来たところを悪いが、俺は逃げるぞ」当惑する清兵衛に余吾は身の上話しをはじめた。浪人をしていた余吾は七年の間仕官の口を求めた旅の末、ようようの事で海坂藩の家老長谷川に気に入られ仕官できたのだ、しかし長く辛い旅の間に妻は労咳を患い、ひとり娘も同じ病となり亡くなっていたのだ。清兵衛は闘志を失う。そして、自分たち下級藩士の困窮ぶりをいう。妻の葬儀での費用で武士の魂である刀を売った話しをしながら「父から譲り受けたいい刀でありましたども、もう剣の時代ではねえという思いもあったもんでがすさけ、これは恥ずかしながら竹光でがんです」とかたわらに置いた大刀を見せた。余吾の顔が突然怒気をふくんだ「お主、わしを竹光で斬るつもりか」「そうではありません。私が戸田先生から教えてもらったのは小太刀でがんです。あなたとは小太刀で戦うつもりでがんした」「小太刀？そのようなおなこの剣法でこのわしが斬れると思っているのか。お主、わしを馬鹿にしているな」凄まじい斬り合いがはじまった。武士の世界の不条理に嫌気がさしていた清兵衛は余吾を逃がしてもいいと思っていたが、武士の誇りを傷つけられたと思って斬りこんでくる余吾相手では獣のような冷酷さで生きるか死ぬかの勝負をするしかなかった。ついに大きくふりかぶった余吾の大刀が鴨居にガッと刃を喰んだ瞬間、清兵衛の小太刀が余吾の胴を深く斬りさいた。勝負はついた。

まるで幽鬼のような状態で家にたどりついた清兵衛に以登が怯える。「以登、おとはん帰ったぞ」その時、萱野が叫ぶ「朋江はん、おとさんが・・・」玄関から朋江が走り出てきた。「あなたがいて下さるとは」「よかった」朋江は破れた清兵衛の袖にしがみつき、子供のように泣き続けた。

後年、年老いた以登が墓地にやってくる。

戊辰戦争で佐幕派についた海坂藩は、官軍と戦い清兵衛は戦死した。しかし、その日まで朋江と夫婦として充足した生活を送った清兵衛は、この墓地で眠り、清兵衛の死後、萱野と以登を連れて東京

で暮らした朋江も今はこの墓地で清兵衛と共に永遠の眠りにについている事をナレーションで知らせながら、以登の乗った人力車が遠く残雪を残した鳥海山を望む庄内平野を去っていくのだった。⁽²²⁾

これが完成した脚本の流れであるが、確かに「竹光始末」「たそがれ清兵衛」「祝い人助八」の三作品が一本の脚本の中に矛盾なく挿入されているのが分かる。

しかし、はじめの企画であった「竹光始末」の物語はこの脚本の中での比重はぐんと小さくなっているのが分かるであろう。そして「たそがれ清兵衛」の物語もまた題名と前半の下城の太鼓とともに帰宅し、家事一切を男の身で仕切る場面や内職の場面、そして上司に突然呼び出され上意討ちを命じられる場面という脚本での物語の流れの中で説明的な場面として採択されたのみである。つまり、この脚本の感情表現の大部分は「祝い人助八」に依存しているといっても過言ではないのだ。

この事は、一度行き詰まった脚本を検討した時点で「祝い人助八」の波津という女性のキャラクターが決定的な突破口になった事は間違いないと思われる。そういった意味でこの波津の存在がこの完成稿となった『たそがれ清兵衛』に大きく影響を与え、波津（脚本上では朋江）にからむ役柄として脚本で創造した、萱野、以登そして年老いた母のキャラクターを完成した時、この三人は朋江を核とする藤沢作品に登場する女性像として同化したと思う。

ならば「祝い人助八」のみで脚本が出来るかということ、それはまた無理であったと思う。この完成した脚本を見れば、「竹光始末」「たそがれ清兵衛」「祝い人助八」のどのひとつでも抜けたら脚本の構成は成立しないし、オリジナルに創造した三人の女性人物が抜けても成立しない物語になっているのだ。それは同時に、この『たそがれ清兵衛』が厳密な意味で原作物と言えるかという問題にも波及するが、確かに言える事は、藤沢周平氏の作品にある武士たちが、女性も含め生きる事に對する透明感のある諦観から発する香気がこの作品からも色濃く漂っていると言う事である。

(注)

- (1) この作品は製作として「日本テレビ」「住友商事」「博報堂」「日本出版」「衛星劇場」の各株式会社が参加している。
- (2) 山田洋次監督は古典落語にも造詣が深く、1966年に監督7作目に落語の「ラクダの馬さん」「寝床」「黄金餅」「つけ馬」などを素材に実は長屋喜劇の『運がよけりゃ』という時代物を撮っている。
- (3) 『戦後 キネマ旬報ベスト・テン全史1946-2002』キネマ旬報社 2003, P. 438 『キネマ旬報』2003, 2月下旬決算特別号での2002年度ベスト・テン選者の本作への評価コメントを2~3紹介してみる。

尾形敏郎 (CMプランナー) 「お見事！と言うしかない山田洋次演出に格の違いを感じた。それ以上に、何か<日本映画>という名の精霊が全篇に宿っている思いもした」(一位選出)

西村雄一郎 (映画評論家) 「黒澤死して時代劇はどうなるんだろう？と思っていたら、こんな所に継承者はいた。『たそがれ清兵衛』は本当によく時代劇を研究している。巨匠が晩年描きたかった山本周五郎原作の庶民の温もりとは、実はこのようなものではなかったかと思わせた」(一位選出)

平辻哲也 (報知新聞記者) 「『たそがれ清兵衛』はオーソドックスでシンプルなストーリーの時代劇だが、実験的と言える大胆なライティング、こだわった小道具や所作で江戸時代の下級武士の日常生活をリアルに描き出した。巨匠山田監督の新境地。そのチャレンジ精神に感服」(一位選出)

- (4) 『キネマ旬報』2003, 2月下旬決算特別号での読者のコメントも1~2紹介する。

大野那智 (主婦) 「『たそがれ清兵衛』は本当にすばらしい作品だった。エンドロールが流れ始めても誰一人しゃべり出す人もいず、席を立つ人も誰一人いなかった (ほぼ満席)。クレジットでさえ皆が息をのんでスクリーンを見つめていた。照明がつき何秒かたってやっと感動を口にしながら席を一人一人立っていった。今までこんな場面に出会った事ない!!」

手塚昭夫 (公務員) 「『たそがれ清兵衛』を見終わった時、「自分も肩の力を抜いて、でも背筋だけはびんと伸ばして生きていきたい」と心の底から思った。この作品はジョン・フォードやジョージ・ステ

イーヴンスの諸作と肩を並べられる名作だと思う」

- (5) 山田監督が『キネマ旬報』2003, 2月下旬決算特別号で「この映画が面白いのは、公開して最初からドットとお客が詰め掛けたわけではないんです。だけど、なかなか客足が落ちなくて11月からお正月を越えても、大勢のお客さんが映画館に足を運んでくれている。それも中高年の人が多い。通常、映画の興行は若年層にターゲットを絞っている。でもこの作品は、仕事をリタイアした中高年のカップル、あるいは老夫婦が観てくれる。そういう人たちに向けて一生懸命映画を作ることが、ちゃんと商売にも繋がるんじゃないかと。それをとても感じました」と述べているが、いわゆる映画の興行に重要なく口コミの現象で波状的に観客を集めた例になる。

最終的に興行収入は12億円となり、2003年度興行収入ランキングの邦画部門の12位にランクされた。これは松竹ではトップの成績である。

- (6) 『キネマ旬報』2002, 11月上旬号。P.43
- (7) わたなべ・ゆたか 1930生。1954年松竹大船撮影所に入社、撮影助手として楠田浩之に師事。現・映像評論家。
- (8) 『キネマ旬報』2002, 1. 2月上旬号。P.101・映画ライター。
- (9) 『小説新潮』1983, 9月号 掲載
- (10) 『小説新潮』1975, 11月号 掲載
- (11) 『小説新潮』1988, 6月号 掲載
- なお以降の(9)(10)(11)の作品からの文章の抜粋は新潮文庫版の『たそがれ清兵衛』平成3年9月発行『竹光始末』昭和56年11月発行からである。
- (12) あさま・よしたか 1940生。監督・脚本家・1965松竹入社
山田洋次に師事して『男はつらいよ』第7作目から脚本を担当し以降の第48作までのすべてを執筆した。
監督作品として『僕たちの交響楽』1976『思えば遠くに来たもんだ』1980『俺とあいつの物語』1981『えきすとら』1982『ときめき海岸物語』1984『二十四の瞳』1987『椿姫』1988『スペインからの手紙』1993などがある。
- (13) 雑誌『シナリオ』シナリオ作家協会 2003, 1月号。P.21
- (14) 前注(13)のP.22
- (15) パンフレット『たそがれ清兵衛』松竹株式会社事業部。2002. 11月。P.10
- (16) 雑誌『シナリオ』シナリオ作家協会 2003, 1月号。P.20
- (17) 前注(13)のP.22
- (18) 前注(13)のP.22
- (19) 前注(13)のP.10
- (20) 前注(15)のP.23
- (21) 前注(15)のP.23
- (22) 映像というのは、そこに写る被写体の善し悪しですべてが決定する。そういった意味で映画では俳優のスクリーン上のイメージの善し悪しで作品の評価が決定してしまう事が多くある。この『たそがれ清兵衛』の評価の高さの原因の大きな要素のひとつは俳優にある。そこで余分だが主な出演者を紹介する。
真田広之(井口清兵衛)／宮沢りえ(飯沼朋江)／田中混(余吾善右衛門)
草村礼子(清兵衛の母)／伊藤未希(井口萱野)／橋口恵莉奈(井口以登)
岸恵子(晩年の以登)／大杉漣(甲田豊太郎)／吹越満(飯沼倫之丞)
小林稔持(久坂長兵衛)

これらの俳優たちがスクリー上で織り成したアンサンブルな演技の妙はすばらしいものであり、脚本作成の上で呻吟した山田、朝間両氏の労苦に充分報いるものであった事を書き添えておく。